

『栄花物語』正編の引歌表現：諸行無常への導き

二宮，愛理
九州共立大学：講師

<https://doi.org/10.15017/4774144>

出版情報：語文研究. 130/131, pp.131-143, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『栄花物語』 正編の引歌表現

— 諸行無常への導き —

はじめに

これまで、『栄花物語』における引歌表現については、後述する松村博司氏の『栄花物語の研究』に「引歌について」と題された一節と、吉田茂氏の論の他は、注釈書にて個々の例が指摘される以外にさほど注目されてこなかった。しかし、後述する吉田茂氏の先行研究によると、出典が分かるものだけでなくも正編で四三例、続編で二八例と、『栄花物語』中に合計七一例あるという。この数だけでも注目に値するものであると考えるが、わたくしに定めた方針に従って正編を再調査したところ、正編だけでも七十例を超える結果となった。

本稿では、このような『栄花物語』正編における引歌表現

二 宮 愛 理

に注目し、引歌が用いられた場面、巻の傾向などについて先行研究を補いつつ調査した。その上で、構成や表現としての意味を見出せないかといった点について考察する。なお、特に断りのない場合、『栄花物語』をはじめとする古典作品の引用は、特に断りのない場合、新編日本古典文学全集（以下、新編全集と略称）により、冊数と頁数を付記した。引用文中の傍線等は特に断りのない場合、引用者による。旧字、旧仮名遣いを一部改めたところがある。

一、先行研究

『栄花物語』の引歌研究は、まず松村博司氏によって正編の引歌箇所の一覧、巻、出典ごとの用例数が表で示された。

物語三十巻の中全く引歌を見ない巻は、二一、一七、二二、二三、二四、二五、二六、二九、三〇の九巻を数へる。(朗詠集の詩を除く) 行文の中に古歌の一句を引用することは王朝文学の常套手段であるが、この物語はかくの如くで甚だ多いとはいへない。又その典拠も三代集(中)でも古今集が最も多い)を中心として、外はほとんど問題とするに足りぬ数量で、変化に乏し^(注1)。

この松村氏の一覧表によって『栄花物語』の引歌研究の土台ができたと言えるが、その後の研究、注釈書によって新たに指摘された引歌もあるほか、松村氏による一覧表には意図的に数に入れられなかった事例があるという点に注意が必要である。松村氏は、「作者の筆になつた文か否か^(注2)」という点を問題として、文体の面から見て他の部分と異なる、つまり『栄花物語』の作者による文章ではなく他資料による引用であると見なし、一部を意図的に数に含めていない。これは、『栄花物語』にはその本文の一部が他の日記などの資料から引用して書かれていると見られることが背景にある。松村氏はそれに準ずる例として、巻十一「つぼみ花」で長和三年に年が変わった際の、過剰に引歌表現が見られる一部分を挙げている。

はかなく年もかへりて、長和三年になりぬ。正月一日よりはじめて、新しくめづらしき御有様なり。あらたまの

年たちかへりぬれば、雲の上も晴れ晴れしう見えて空を仰がれ、夜のほどにたちかはりたる春の霞も紫に薄く濃くたなびき、日のけしきうらかに光さやけく見え、百千鳥も囀りまさり、…(2・三五―三六頁)

引用したのは一部であるが、引歌による新年の寿ぎをこの後も長々と連ねており、他の年変わりと比べると、確かに過剰な印象を受ける。この年変わり表現の直前には道長の娘妍子が三条帝後宮に入内したこと、直後には妍子方の女房たちの装いが華やかであることの記述が続く。また、巻十六にも同様に妍子周辺の記述でこのような表現が一か所認められるため、松村氏は、この年変わり表現は妍子周辺の人物による日記などの資料を用いて書かれた可能性を示唆^(注3)しているが、明言することは避けている。

こうした事情により、松村氏の一覧表ではこれらの例が数に入れられていない。しかし、白井たつ子氏は、『栄花物語』内で他資料を引用している例である巻八「はつはな」の『紫式部日記』の利用箇所について、次のように述べる。

『栄花物語』の作者は、大方において、日記の中から、私的な感慨の表白が行われているところを、切り捨てようとしたには相違ないが、外的事象と、自己の内面の問題とを、しかと絡み合わせて叙述している『紫式部日記』

が、優れた主体性を持つて叙述されていれば、それだけ、これを利用する側の困難は大きかったはずである。^(注4)

白井氏は、『栄花物語』では他資料を取り入れるために意識的な操作があったのではないかと指摘している。このことを踏まえると、前掲のような過剰な年変わりであっても『栄花物語』の意図に沿うものとして敢えて残されているのではないかと想定できる。いずれにせよ、厳密な考察を行うためには、初めからこうした用例を弾いてしまうことはせず、後から必要に応じて分類をする方法を取るべきであると思われるため、今回改めてそれらを含めた調査を行った。

次に、他作品ではあるが『源氏物語』内の引歌表現について、山口博氏の研究をあげる。山口氏は、『源氏物語』の中で引歌の用例数が多い巻をあげると、「須磨——明石——松風」「若菜上——若菜下——柏木」「権本——総角——宿木」の三つのまとまりを持った集合が浮かび上がることを指摘している。

物語構成上の重要な巻々を指摘するには甲論乙駁があるうが、この三系列が重要な部分であることは認められよう。(中略) あやどられるべき所、それが物語構成上重要な巻々であつて始めて意味がある。あたかも物語のクライマックスに歌を配置するようなものである。(中略) 源氏物語の作者は、引歌を単なる修辭から構成にかかわる

技法に昇華せしめたのである。^(注5)

山口氏が「構成にかかわる技法」と述べたように、引歌数を物語構成の一つの指標として見ることは、『源氏物語』に影響を受けていると思われる『栄花物語』においても可能であろうかという疑問が湧いてくる。

続いて、吉田茂氏は、この山口氏の研究を『栄花物語』に援用し、正統での引歌の用いられ方の差異についても言及している。

正篇では自然(風景)描写に引歌が用いられ、続篇では特に装束描写に集中するかたちで引歌が用いられている。両者は同じ引歌のようだが、その効果には大きな差異があるとと思われる。(中略) 正篇を記した作者は、歴史的出来事に取材しながらも、歴史そのままの記述を超えて、「物語」を創出しようという明確な意思を持っていたのではないだろうか。一方、続篇の作者にはそれほど明確な意思は感じられない。^(注6)

さて、これまで見てきたように、現在の研究の土台となっている松村氏の一覧表には不十分なところがあり、これのみに頼った研究には無理が生じてきている。そのため、松村氏の一覧表以降の研究を含めた再調査を行うことが必要である。本稿では、再調査の結果に基づき、山口氏が述べた「物語

構成上の重要な巻には引歌が多いのではないかと考えた事は『栄花物語』でも同様に見られるのかという点について考える。『栄花物語』においては巻別の引歌用例数にどのような意味が見出せるかを調査、検討したい。なお、今回正編のみを対象としたのは、吉田氏も指摘するように『栄花物語』は正編と続編でその性質がかなり異なること、また正編に関しては比較的先行研究があることから、まず正編を調査、考察した上で、今後の研究の足掛かりにするためである。

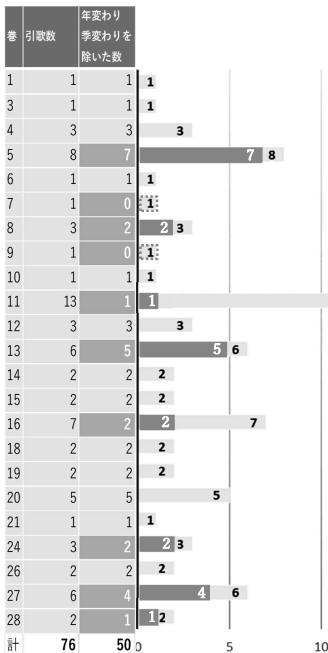
二、用例数と内容の関係

再調査に当たり、基本的には『栄花物語の研究』で提示された一覧表をベースとして、そこで指摘された項目の再検討と、『栄花物語全注釈』と新編日本古典文学全集、また吉田氏によって指摘された項目の追加によって、新たな一覧表を作った。ただし、それに加えて、従来指摘のなかった部分について、筆者が追加した部分がある。再調査の方針として、特に注記が必要と思われるものを以下に挙げる。

1. 別資料からの引用の可能性がある箇所も数える。
2. 一つの言葉に複数の引歌表現が含まれる場合、二例と数える。

3. 複数の歌集に重複して収録されているものは勅撰集を優先して数える。
4. 参考歌、類歌が多く特定し切れないものは、最も場面の内容と一致すると思われるものを選定する。
5. 現存の歌集に見えない歌の引用は「不明」として数える。
6. 典拠が不明であっても、五及び七音の和語かつ「…と」などで示されているなど、引歌と認められるなら「不明」として数える。

図1 巻別引歌数



作中の引歌数を巻別に集計して（図1）にまとめた。引歌が確認できなかった巻は表記していない。単純に数を見ると、前述した長和三年の年変わり用いられた引歌数が圧倒的に多いため、巻十一が十三例と突出している。続いて多い順に挙げていくと、巻五、十六、十三、二十七、二十という結果となっており、ここまですべて五例以上の引歌を含む巻となっている。四例の巻はなく、相対的に見て「多い」とするには五例で線を引くのがよろしいと思われる。表の右行、濃い色で示した部分と同色の帯で、松村氏が除くとしていた巻十一での引歌群と同様の年変わり・季節変わりに用いられた引歌を除いた残りの数を試みに示した。これで確認しても、引歌を大量に用いる年わりは妍子周辺の巻十一、十六以外に目立ったものはない。また、他に一か所に集中して引歌が用いられた例は見られなかった。逆に言えば、妍子に注目する年わりが^(主)あっても、場面にふさわしくなければあのように華美な引歌表現は使っていないのである。

さて、これら六つの巻の共通点は何かと考えると、なかなか難しいものがある。内容に注目すると、巻五「浦々の別」は伊周兄弟の左遷と帰京、巻十一「つばみ花」は禎子内親王の誕生記、巻十三「ゆふしで」は敦明親王の廢太子、巻十六「もとのしづく」は疫病と死、巻二十「御賀」は倫子の還暦の

賀、巻二十七「ころもの玉」は家族と死に別れた人々の嘆き、といった具合に、各巻の主題的な内容がそれぞれあるように思われる。しかし、それ自体に関連性があるわけではなく、編年体という性質上、各巻は必ずしもそれだけに集中しているわけでもない。加えて、これらの巻の中心的話題は、道長方のできごとに限らないという点にも注目される。様々な家の、様々な人々の、喜怒哀楽に注目していると見えるだろう。

このように、巻毎のあらずじや巻名の特徴を参照する限りでは、『栄花物語』の引歌表現の特徴が『源氏物語』のそれと同じと見るにはいささか早計であろうと思われる。六巻は連続せず正編全体に分散しており、『源氏物語』で見られたように、関連する話題で巻集団を形成することも一見しただけでは難しい。そこで、正編全体で見た場合に、これらの巻が重要な部分と認められるかどうかを考えてみたい。以下に岡一男氏による『栄花物語』正編の総括を引用する。

上篇では「浦々の別」における道長の反対派伊周一家の流涕のさまや、「輝く藤壺」「鳥辺野」「はつ花」の諸巻の彰子中宮の栄華のさまと定子皇后の悲劇的な死との対照などすこぶる精彩があり、その後は彼一家の顕栄、子女の入内・立后・出産、外孫皇子の立坊・即位の華やかな諸儀式がはてしなく続く。特に巻十五「疑」で、道長が

出家してからは、その法成寺創建を中心とする仏事供養の盛儀に筆力を悉し、「本の雫」「音楽」「玉の台」「鳥の舞」などで、我々はその未曾有の堂塔の荘嚴と天皇・東宮・三后の行幸啓の下で行われた供養の華美絢爛なさまに恍惚とされる。しかし、盛者必衰の理で、道長は三女一男に先立たれつつ、万寿四年十二月六十二歳で薨するが、そのさまを釈迦の入滅に比して、「鶴の林」に描いている。そして翌年の二月の除目に、道長の六男長家が権大納言に陞るので、上篇は終っている。^(注8)

『栄花物語』の重要なトピックとして「伊周一家の流謫」「彰子と定子の対照」「仏事の盛儀」「道長一家の繁栄」そして「盛者必衰」が挙げられている。「浦々の別」は伊周一家の流謫、「つばみ花」と「御賀」は道長一家の繁栄を描く巻と捉えられる。しかし単純に、引歌が多い巻はこれらのトピックが見える巻であるとしてしまうには、廢太子や前齋宮の話題が混在していた「ゆふしで」をどう解釈するべきか、「もとのしづく」「ころもの玉」を仏教や盛者必衰に注目した巻として良いのかといった疑問が残る。そこで、次節では、先に挙げた六つの巻の内容を二つの視点から観察することで、これらの疑問を考えた。

三、引歌が多い巻で読む『栄花物語』

本節では、前掲六巻のできごとを〈道長中心〉に見るか、道長に敵対する〈道長以外〉の視点で見えるかによって、見え方がどう変わるのか、またそれらについて『栄花物語』はどういった記述をしているのかについて考えてみたい。

巻五「浦々の別」

本巻は中関白家に注目され、その没落と悲哀を描いている。まず〈道長中心〉の視点で見ると、それは「ライバルが弱体化していく様」を詳細に見ていくことに他ならない。伊周の帰京で巻五の幕が閉じたあと、巻六「かかやく藤壺」では打って変わって彰子の裳着と入内準備という明るい話題によって幕開けとなる。史実では彰子の入内の六日後に敦康親王が誕生するのだが、そこに意図的な操作が入っていることは拙稿^(注9)にて述べたところである。〈道長中心〉の立場で、かつ意地の悪い言い方をすれば、巻五は、巻六にて栄花の始まりとなる彰子入内という話題を華々しく演出するための、言わば「前振り」である。しかし、そのような悪意は、本文からは伺えない。

反対に〈道長以外〉の視点から見た場合、伊周の傷心に寄

り添い、敗北者への同情を誘い、道長という勝者がいた歴史の違う一面を眺める巻であると言えるだろう。それは一度播磨へ配流された伊周が、密かに京へ戻っていたことへの世間の批評にも表れている。

世の人、この殿の御有様を、あるは、「あしうしたまへれば、ことわり」と言ふ人もあり、またすこし物の心知りたる心ばへある人は、「かの御身にては、おはしたるににくからず。母の死ぬべきが、われを見て死なん、われを見て死なんと、寝ても覚めても言はむを、身はいたづらにならともなど思すにこそはあらめ。あはれなることなりや。」(一・二六五頁)

危篤の母高階貴子に一目会うため、密入京の罪を犯した伊周に対する賛否両論が描かれる。伊周に同情的な意見を「物の心知りたる心ばへある人」のものとして、母のため故の行動であり、「あはれ」であると述べている。「決して推奨はされないが、人の心を打つ、情にあふれた行為である」という評価となろうか。

巻十一「つぼみ花」

禎子内親王の誕生を書いた「つぼみ花」

は、〈道長中心〉にして見れば、その名の通り榮花のつぼみの一つであり、喜ばしいできごとであろう。しかし道長の描写

を詳細に追うと、やはり内親王であったことには不満を感じている様子が見える。

殿の御前いと口惜しく思しめせど、さはれ、これをはじめたる御事ならばこそあらめ、またもおのづからと思しめすに、これもわるからず思しめされて、今宵のうちに御湯殿あるべくののしりたつ。(二・二三頁)

今後は男皇子も期待できようと思ひ直してはいるが、ここで「口惜し」という道長の感想を記したことは注目される。これは道長の野心を思わせるものであり、一種の伏線でもあるだろう。この後妍子には期待していた男皇子が生まれなかつたことや、敦明親王の廢太子があることを思えば、ここは道長にとつての一つの試練を予感させる場面なのである。

一方、〈道長以外〉の視点で見た場合、巻の冒頭に少し語られる一条後宮の後日談と、妍子に仕える女房たちに注目される。顕光女元子には源頼定が密かに通っており、二人の恋愛は父顕光に快く思われていない。父は娘の髪を切つて尼にし、それでも密会をやめないのが家から追い出してしまう。このような乱暴な結末に対し、世間の反応という形で顕光の行動を批判している。

宰相もさるべきにこそと思ひつつ、おろかならず通ひきこえたまふほどに、おのづから御髪なども目やすくなり

もてゆく。あやしうひがひがしきことに世の人も思ひきこえたり。同じき若君達といへども、これは村上の四の宮、源帥殿の御女の腹なれば、いとものきよくものしたまふを、あやにくにこの殿のたまふをぞ、かへすがへすあやしきことに人聞ゆめる。(2・二〇頁)

当の宰相頼定は色好みとして知られた人物ではあったものの、元子を大切にしているようであり、しかも村上天皇と源高明の孫であるから実に高貴な人物である。娘の再婚相手としてはふさわしいであろうに、この頑迷は何であるかと人々は噂したのである。『栄花物語』ではこの顕光について、年老いて偏屈になった人物という表現が度々見られる。

また、皇女を得た妍子に対し、その女房の中には、元々は帝の妻になるべく育てられたような姫君たちの名前が挙がっている。彼女らが女房として他家に仕えるのは実に屈辱的なことであり、しかし抗えないことでもあったであろう。『栄花物語』は道長家を直接批判しないが、「さてもあさましき世なりや。太政大臣の御女もかく出でまじらひたまふ、いみじきことなり」(2・三三五頁)と述べている。

卷十三「ゆふしで」

卷十一で予感された道長の試練は早くもここで現実となる。本巻では三条天皇崩御、敦明親王の廢

太子、そして親王と道長女寛子との結婚が描かれる。(道長中心)の視点では、この廢太子を以て道長の地位が揺るぎないものになったのは間違いない。しかし、肝心の後一条天皇の元服や、道長の任太政大臣には言及がない。松村氏は、『大鏡』では詳細に廢太子の真相が語られているのに対し、『栄花物語』では敦明親王と寛子の結婚や、それと対比される延子と顕光の姿に関心を持っているようであると指摘する。

では、その顕光や延子のような(道長以外)の人々にとつて、本巻で起きたことはどういった意味を持つか。言うまでもないことである。今上帝と東宮がどちらも道長の孫となつた今、それに勝利することは困難である。『栄花物語』は、この廢太子は「氣ままな自由を懐かしむ親王による辞退」という姿勢を貫いているが、親王の意思は否定しない。その一方で、婿に見捨てられた顕光に対する姿勢は依然として厳しい。

高松殿の有様を、院いかに御覧すらむと、御目移りのほども、恥づかしうすずろはしう思さるる御心の内もことわりながら、またあながちなり。(2・一三三二頁)

寛子方と比べられては、小一条院はそちらに目移りしてしまうことだろうと考える顕光の心中に理解を示しつつも、「あながちなり」とする。新編全集は「身のありようをわきまえぬというもの」としているが、ここはやや意識であろう。

こたみは男女の御有様あながちなるまじけれど、なほさし並ばせたまはんほどの威さはこよなかるべければ、同じさまを思し心ざすべし。(1…四三三頁)

卷八「はつはな」にて、敦成親王誕生後、彰子が再び懐妊する。既に男皇子が生まれており、次に生まれる子には男女の有り様に「あながちなる」ことはないのだが、それでもやはり男皇子が二人立ち並ぶのはこの上ない喜びであるから、という内容である。この用例を見れば、「あながちなり」という表現は、「強情にこうでなければならぬと考えること」であると思われる。では、顕光の何が「あながちなり」なのかという点、いつまでも敗北を受け入れられないことではないだろうか。顕光の描写の直前には、「上陽白髮人」の詩句が引かれ、延子が小町の「わが身世に経る」という歌句で嘆いている。こちらは批判ではなく「あはれ」が強調されるが、二人の嘆きは同じである。

ところで、定子所生の敦康親王は、またしても帝位を逃したことになるが、敦康親王への言及は、顕光と延子に比べればかなり少ない。

式部卿宮、この方にはむげに思しめし絶えにしかど、このたびの際にはかならず立ち出でさせたまふべかりつるを、御宿世をば知らせたまはずとも、なほあやしくとは

いかでか思しめさざらん。世とともにはればれしからぬ御気色にも、心苦しうなむ。(2…一一二頁)

不条理なことに鬱々とはするが、彼は顕光と違ってすっかり諦めていた。自分の後ろ盾のなさをよくよく理解していたのであろう。この「諦観」が顕光との違いである。そして顕光の「執心」に対する批判は、物の怪となって道長家に大きな祟りをもたらすことの、一種の伏線であると思われる。敦康親王も『栄花物語』では一度だけ物の怪として名前が挙がったことがあるが、その時は大ごとにならず収束している。

卷十六「もとのしづく」

本巻は延子や顕光をはじめとした多くの人々の死や病の流行といった記述が目立つ。(道長中心)の視点でも当然この社会不安が根底にあるが、それに対して道長は阿弥陀堂を建立しようとしていることが語られる。ゆくゆくは法成寺に発展するものであり、道長の仏教帰依の一つと言えよう。他にも道長家に関わる仏教の話題は、妍子方での法華経書写、倫子と明子の出家、倫子による西北院建立、法成寺金堂供養の準備がある。また、四女嬉子の東宮参入の記述は、暗い社会背景に反して華やかである。このように、世間は暗い雰囲気である一方、道長の周辺人物たちが仏道に励む姿が差し挿まれる構成になっているのである。異母

兄弟の道綱以外に、身内の不幸がなかったからという理由もあるが、道長の視点が治世者としての視点となっていることも一因であろう。治世者にとって、死者の増加や疫病は「自らが治めている世の中の社会問題」なのであり、仏教の話題が増えるのは、治世者一族がその社会問題に対応する手段として仏教に頼っていることの表れではないかと考えられる。

一方、〈道長以外〉の人々が登場する場面は、ほとんどが誰かの死に関わるものであり、社会問題ではなく自らに起こったできごととして、死や病に向き合っている。巻名の由来でもある小一条院による引歌は、延子の死に対するものである。ここでは当然父顕光にも言及があるが、この老父はやはり嘲笑の的である。もう一人の娘である元子と連れ添い、体面上は婿であるはずの源頼定にも見捨てられており、それは顕光自らが招いたことであつたのだと念を押す。しかし二年後、顕光自身が死去すると「あはれに心細き御事なり」(2・二三二頁)と否定的な見方はされていない。巻十三での廃太子と寛子との結婚以降、『栄花物語』は顕光に厳しい目を向けてきたが、その死の描写はあつけない。

卷二十一「御賀」

本巻は、ほぼ道長家の祝賀に集中している巻である。〈道長中心〉の視点では当然家族の慶事であるが、

『栄花物語』は倫子や御賀の儀式にだけ注目しているわけではない。普段は一堂に会することの少ない彰子、妍子、威子、嬉子の四姉妹が参集し、更に妍子所生の禎子内親王も加わっている。彼女たちが引き連れている女房たちの描写もまた引歌を用いていきらびやかである。その他、庭の景色、調度品、集まった人々への禄なども、道長家の圧倒的な栄えを象徴するものである。

そのような道長家の繁栄も、〈道長以外〉の視点から見た場合には、「敗北の象徴」となるであろう。「浦々の別」が道長にとって「ライバルの弱体化」、つまり政争に勝利したことを意味していたのとは逆の構図である。しかし「浦々の別」の中関白家の没落には、次の巻から始まる道長家の繁栄を際立たせるというもうひとつの意味があつた。ではこの「御賀」はどうだろうか。本巻に続く巻二十一「後くゐの大将」では、道長の息子教通の妻(公任女)が出産後に物の怪によって亡くなる。これは道長家に大打撃を与える事件ではなかったが、物の怪騒ぎはこれだけに留まらなかったのである。

卷二十七「ころもの玉」

本巻は、巻二十五「みねの月」と巻二十六「楚王の夢」にて物の怪によって死去した寛子と嬉子の死後から始まる。〈道長中心〉の視点で見る本巻は常に悲

しみに沈み、「物の怪によってもたらされた死を嘆く」巻であったと言えよう。娘の死を嘆く斉信も、その悲しみに呼応しつつ出家を選んだ公任も、もはや道長にとっては鏡を見ているようなものである。嬉子は親仁親王を遺していったが、その親王の五十日祝いも、道長にとっては死んだ娘を思い出す機会となってしまうている。

東宮よりも思し至らぬことなく、こまかにせさせたまへるにつけても、殿の御前、いとど忍びがたく思さるべし。

花籠や折櫃物など、殿上人などにのたまはせられたれば、みな書きつけをしつつまゐらせたり。あべいかぎりはめでたきにつけても、ましてとぞ思されける。(3…三三三頁)

巻末では中宮威子が春以来妊娠していることが語られるが、二度にわたって娘を失った道長には、「いみじう思されながら、もの恐ろしい胸つぶれ」(3…七五頁)と感じられ、これも不安の種となるのである。

では、〈道長以外〉の人々にとって、娘の死によって弱った道長を他者が眺めるものとなっているかという点、そうではない。その他にも人々の死を報じる記事は多く、正体には言及がないものの斉信女も物の怪による死であり、しかもこちらは死産であった。こうした世の中の様子は「誰もよそよそなればこそおろかにもあれ、おのおの御家には、これに似た

ることなしとのみ思しまどふぞ、げにいみじうあはれに見えたまひける」(3…四〇頁)と評される。この巻では道長も道長以外も嘆きの「当事者」なのである。

四、諸行無常への導き

ここまで、六つの巻について二つの視点から各巻がどう意味付けられるのかを分析した。ここまでの分析で得られた内容を表にまとめると〈表1〉のようになる。

表1 引歌数の多い巻による物語展開

巻	道長中心	道長以外
5	影子入内 (ライバルの弱体化)	中の関白家の没落 (続く影子入内との対比)
6	妍子に禎子内親王誕生 (後宮における試練の予感)	顕光の顕達 高貴な姫君たちの没落
11	試練を乗り越えて外戚確立	敦明親王廃太子 敦康親王、延子、顕光の嘆き 顕光の執心
13	社会問題への対応策としての仏教帰依	自家に関わる疫病や死 顕光と延子の死
16	家族の慶事、自家の栄え (続く道長女の死との対比)	(政争における敗北)
20	寛子、嬉子の死	
25 26	物の怪による死に対する嘆き	物の怪による死に対する嘆き
27		

太字は展開の伏線や、その伏線の回収がされている部分を示している。濃い色で示した部分は、引歌数の上では該当巻ではないが、補足として表記している巻である。引歌数が多い巻々は分散しているようでいて、実は話の展開には繋がりを持っており、この六巻だけで一種のあらすじを追える巻の集団である。そして、そのあらすじは最終的に物の怪となつて道長家に害をなす顕光親子に大きく関わっていると見えよう。前節にて挙げた巻十三「ゆふしで」をどう解釈するべきかという問題についても、顕光悪霊化の伏線を内包した巻として位置づけることができる。また巻十六「もとのしづく」は、岡氏は仏教行事の華美を述べる巻として挙げていたが、顕光親子の死が描かれるものでもある。

しかし、『栄花物語』の正編を全体的に見た場合、物語は顕光にそれほど注目しているわけではない。巻八までは伊周が存命しており、中関白家との対比構造が続いている。中関白家における巻五「浦々の別」のように、顕光家だけに集中した巻もない。また、巻十五「うたがひ」以降は仏教を中心とした、いわゆる「法成寺グループ」の巻が見え始め、顕光親子が関わる話題の合間にそれらが挟まれることになる。加えて、延子の心情に用いられた引歌は数例確認されるものの、顕光について用いられた引歌はない。

それらを踏まえると、この引歌数は顕光自身に注目させるためのものではなく、巻の展開や場面を飾り、強調し、印象付けるためのものであると言えよう。道長にとつての栄花ばかりを徹底して述べる巻、所謂「敗者」と呼ばれる人々の嘆きを描いた巻、社会全体が暗闇に沈んでいる巻、「勝者」と見られていた道長家の人々までもが等しく「死」という悲しみを心得る巻など、引歌で飾られたこれらの巻を並べると、さながら群像劇の様相を成すのである。そして、その巻々の最後に「勝者と敗者が同じ悲しみを感じている巻」が当たっていることは、群像によつてつくられた「諸行無常」の歴史の姿を読むに印象付けたという『栄花物語』の意図を象徴しているとは言えないだろうか。それは坂本太郎氏が「道長の栄花を述べ、その人となりを讃嘆するのに誇張のいい廻しをしているが、しかし著者はすべての人に深い同情をもち、共感をいだいて筆を進めている」とした「善意の歴史」にも通じるものがある。

おわりに

本稿では『栄花物語』の正編における引歌表現に注目し、その用例数の比較的多い巻について、道長を中心にした視点

と道長以外による視点を比較しつつ、内容や構成について分析した。その結果、引歌で飾られた巻々は必ずしも道長の栄花を語るばかりのものではなく、道長の栄花の陰に隠れた敗者の様子や、勝者と思われた者でさえも死を嘆いている様子に目が向けられるような仕組みを成しており、道長にとつての「ただの栄花」だけでなく、「諸行無常」を浮かび上がらせる機能を有しているのではないかという考察結果を得た。『源氏物語』で「物語構成上の重要な巻」に引歌が配置されていたのとは少し異なるが、『栄花物語』が表現したいものを浮かび上がらせることを意識して引歌を用いていたとするならば、その叙述と構成の能力は大いに再評価されるべきではないだろうか。

今回は数量的な調査に比重を置いたが、決して多くないと言われていた『栄花物語』の引歌表現は、その詳細な内容についても意味を見出すことができるのではないかと思われる。また、続編についても改めて調査研究を行うことを今後の課題としたい。

注

注1 松村博司『栄花物語の研究』「正篇の典拠」刀江書院／一九五

六 三二五頁

注2 注1 三一六～三二七頁

注3 松村博司『栄花物語全注釈 三』角川書店／一九七二 二二九頁

注4 白井たつ子『紫式部日記』と『栄花物語』「はつはな」との比較の問題」『日本文学研究資料叢書』歴史物語Ⅰ『有精堂出版／一九七一 * 初出「文芸研究」五三／一九六六

注5 山口博『源氏物語の引歌』山岸徳平、岡一男監修『源氏物語講座 第七巻・表現・文体・語法』有精堂出版／一九七一

注6 吉田茂『栄花物語』の和歌・引歌考』山中裕、久下裕利編『栄花物語の新研究…歴史と物語を考える』新典社／二〇〇七

注7 例えば、巻十六「ものとしづく」では、治安二年の年変わりに続いて妍子の遷御予告や姉彰子との贈答があるが、特に目立った修辞はない。(2・二二五頁)

注8 岡一男『古典逍遙——文芸学試論——』十三(一)「歴史物語(第一稿)」笠間書院／一九七一 三五六頁 * 初出 高木市之助ほか『日本文学講座 第二巻』河出書房／一九五〇

注9 拙稿「史実を欺く『栄花物語』…巻五「浦々の別」における年次設定」『語文研究』一二三／二〇一七

注10 注3 解説四七三頁

注11 「さまざまの御物の怪どもいみじうこはし。関白殿わたり、式部卿宮さへ出でたまひて、いと恐ろしきこと多かるなかに、東宮の御乳母などの、貴船に祈り申したるなどいふことさへ御物の怪申すを」(3・七五頁)

注12 坂本太郎『日本の修史と史学』第二章「物語風歴史と宗教的史論の時代」講談社学術文庫／二〇二〇 * 原本 坂本太郎『日本の修史と史学』日本歴史新書／至文堂／一九五八

(にのみや あいり・九州共立大学講師)